



城東図書館 2023年11月17日～12月20日実施

## まちのひと 増本 利宏さん他 日本匠女子倶楽部執行部の皆様の紹介本リスト

日本匠女子倶楽部執行部 バッグクリエイター エルクッカ 前波りか子 さん からのご紹介

買う幸福: おしゃれ人生見直し! 捨てるためにひとつ買う	地曳 いく子/著	小学館
<p>ストレス発散で買い物をする。買い物をするストレスが発散される。などとは、うまく言ったもので、ほんとに気持ちがあすっきりして気分が上がります。</p> <p>ただ、買ってどんどん増やしていくのではなく、買うために一つ捨てる。ひとつ買ったらひとつ処分する。というルールにもとづいて、作者がものの選び方やものを買う喜びを解説しています。「衝動買い」や「清水買い」などと呼び、一生ものを買うという意味ではなく、クローゼットを新しくし、買い物の楽しさを伝えている。</p> <p>断捨離断捨離と、いかにも人生の整理をしないといけないという本が多い中、一生ものだと気負うのではなく、幾つになっても買う楽しみを想像しながら、新しい自分と出会えたらいいな、と思わせてくれる本でした。</p>		

ものづくりっておもしろい! おもちゃから乗り物まで	小林 竜太/著	借成社
<p>私の仕事は鞆を作ることです。どんなものを作るかデザインし、型紙を起こし、試作をし、型紙の修正をして、また材料を裁断して組み立てます。めんどくさそうな過程でしょうか？でも、ものづくりの過程って面白いものなんです。もともと子供のころから、何かを手を使って作ることが好きで、子供むけ雑誌のふろくの組み立てや、割りばしなどで工作。</p> <p>この本の作者も想像してそれをカタチにすることに喜びを感じ、動くものやメカニックなものを作っていくが、そういうものでなくても、自分がなにか作ってみたいものを工夫して作る楽しみを見出してほしいなあ、と思います。この本を読めばなにか小さなものでも、役に立たなくても、自分で考えて、手を動かしてつくってみたいくなるかも！</p> <p>日本には資源がない。人間の想像力と実現力が日本の宝だと思っています。</p>		

日本匠女子倶楽部執行部 アクセサリー作家 池原幸さん からのご紹介

棄種たちの冬	つかい まこと/著	早川書房
<p>この世界の終末を生き延びる少数派「棄種」と、質量のない生命を得た演算世界の多数派人類。両者の隔たりと交わりを書いたディストピア小説。無いものを求める性の乱闘だ。</p> <p>死をもコンテンツの一つとして創造する演算世界の人類。一方、過酷な環境の「棄種」には、肉体内側だけが暖かい棲家となる。</p> <p>主人公の少年少女、キノコや毛皮など、物理世界にある物の細かい生活描写が、演算世界との対比として際立つエッセンス。</p> <p>演算世界から実世界に干渉しようとする者が出てくるくんだりには難解だけれどさほど気にせず読み進むと面白い。</p> <p>演算世界が物理世界を管理掌握する…我々が薄々感じている近未来。この少年少女を思い出しながら経験するのも悪くない。</p> <p>人は「死ぬその時まで生きる」。</p> <p>当たり前に見えるこの一文の計り知れなさよ。</p>		

日本匠女子倶楽部執行部 SNS担当 A.WORKS 細川勝史さん からのご紹介

夢をかなえるゾウ	水野 敬也 / 著	飛鳥新社
<p>この本は、主人公の佐藤一郎がゾウのガネーシャから「人生の目的」を達成するための教えを授かり、成長していく物語である。</p> <p>本書を最初に読んだのは今から15年前。私がまだサラリーマンだった頃。当時の私は成功したい成功したいと気ばかり焦る若造だった。でも地道な努力こそが成功への近道だと教えてくれた本である。</p> <p>今回改めて本書を読み返した。脱サラし、独立した私は自分の夢をもう一度見つめ直すきっかけとなった。そして、夢を実現するために、日々の生活の中で出来ることを継続することが最も大事なんだと実感する内容である。本書は自己啓発本でありながら、読みやすく面白いストーリーになっている。関西弁で話すガネーシャのキャラクターも魅力的で、最後まで飽きずに読むことができる。</p> <p>夢を持ち、それを実現するために努力したい人、そして人生の岐路に立っている人にお勧めであるとともに、立場が変わった自分と改めて向き合うことの出来る賞味期限の長い一冊である。</p>		

日本匠女子倶楽部発起人 (株)あるつくじやぱん 増本利宏さん からのご紹介

機関車トーマス	ウィルバート・オードリー/作 レジナルド・ドールビー/絵	ポプラ社
<p>昔、長女が5歳・長男が2歳半ぐらいの頃、夜寝る前に必ずふとんで川の字になって絵本を一冊ずつ読み聞かせました。その頃長男が大好きだったのが機関車トーマスで、毎晩のように読み聞かせるので、文字は読めなくても物語は完璧に覚えていました。だから時々物語を途中から創作して横道にそれるようにボケると姉弟で「ちが〜！」と言ってツッコミを入れてきます。毎晩それを繰り返すと、子供達も『今夜はどこを変えてくるかな?』とワクワク待つようになりまして。毎晩毎晩「ちが〜！」「ちが〜！」の大合唱に、しまい「ええかげんにして寝なさい！」とお母さんから3人も叱られました。</p> <p>ボケとツッコミと創造力の養成は、もしかしたら毎晩の絵本読み聞かせの「番外編」で培われるかも知れません。桃太郎を栗太郎にしたり、ジャムおばさんが出てきたり。今晚やってみては?</p>		
あなたの出会いはすべて正しい	中谷 彰宏/著	PHP研究者
<p>43歳で脱サラして「さあ俺は自由だ、何でも出来るぞ〜」と思ったのも束の間、人生はそれほど甘くなく、まだまだ学費の掛かる子供達をどうやって食わせるのかと妻の冷たい視線を受けながら毎日就職活動に追われた日々。小遣いは無いけど時間だけはたっぷりあったので、取り敢えず子供達の手前、毎朝「行ってきますあす」と言っただけは図書館に通っていた。そこでふと手にしたのがこの中谷彰宏氏の本であった。落ち込んだりつまずいたりさったりした日々の何気ない出会いを違う角度から見ればとてつもなく光り輝くことなのだ知らされた。それから中谷氏の執筆本の多さに驚かされたが、かなり読み漁った。どの本もその読者の行動は否定せず、ただ別の角度で見直したらもっと良くなるよと言われているようだった。それから再就職して、5年後には独立起業できた。</p>		
嘘ですけど、なにか?	木内 一裕/著	講談社
<p>最初にこの本を手にしたのは、本屋さんで縦積みされた表紙にまず目が行ったから。表紙の女性がそのタイトルを言っているようで、しかもその女性と目が合ったから。何とも不純な理由だが、購入して読んでみたらとにかく止まらない。これほどのスピード感と爽快感とワクワク感は他にあったらどうか。特に主人公水嶋亜希の頭の回転の早さとその嘘に脱帽。それからはこの著者の本を買っては読み、読んでは買っただけでなく繰り返して全て読み終えた。何故これほどまでに引き付けられるのかと思ったら、実はこの著者は漫画家で「ビー・バップ・ハイスクール」は有名である。だから読者の心と脳を驚嘆みにして離さないのかも知れない。仕事や勉強や生活で悩んでいるときに読んでみてはいかが? (止まらないから要注意ですが)</p> <p>ちなみにその表紙の女性は写真かと思ったら、なんと著者の鉛筆手書きの創作ということで更に驚いた。</p>		
塩狩峠	三浦 綾子/著	新潮社
<p>この小説を読んだのは一体いつ頃だったろう? たぶん起業間もない頃だと思うが、なぜこの小説を手にしたかは記憶にない。ただその当ても「これほど涙した小説は今までに無かった」と記憶しているし、起業して有頂天の自分を戒めた一冊であったような気がする。しかもこの小説が、ほぼ実話であることが余計に驚きと涙を誘ったのかもしれない。主人公の永野信夫がまさに日本版イエス・キリストではないかとさえ思ってしまう。宗教のことはよく分からないが、冒頭のこの言葉の意味が最後に分かった時には涙していた。時間のある時にゆっくりと読んで欲しい一冊です。</p> <p>一粒の麦、 地に落ちて死なずんば、 唯一つにて在らん、 もし死なば、 多くの果を結ぶべし。 新約聖書ヨハネ伝第十二章二十四節</p>		
祈りの幕が下りる時	東野 圭吾/著	講談社
<p>推理小説が大好きで、色々な著者のものを読んできたが、やはり東野圭吾のものに外れはない。ストーリーが奇想天外で、謎が謎を呼んで推理小説の醍醐味を味わうことが出来る。特にこの本の主人公加賀恭一郎シリーズは本当に面白い。映画やTVドラマにもなっているから見てから読むか、読んでから見るかの楽しみもある。</p> <p>中でもこの「祈りの幕が下りる時」は、親子愛がテーマとなっており、その葛藤から起こる事件を見事に推理小説として仕立てている。映画でも泣いたが、小説読んで泣いてしまう。特に子を持つ親として、推理は解けても解けない絆を再認識させられた。</p>		
すいません、ほぼ日の経営。	聞き手:川島蓉子 語り手:糸井重里	日経BP社
<p>私が独立起業した時に専用HPを立ち上げ、毎週末にブログのようなコラムを書いてみた。その元になったのはコピーライター糸井重里氏のWebサイト「ほぼ日刊イトイ新聞」だった。</p> <p>「毎日よくこんなに色々な事が書けるもんだなあ、俺にも出来るかなあ」と言うのが始まりで、それから私も毎週書き続けて15年。650回掲載したがコロナ禍の2021年4月に終了した。コロナ禍でも日々明るく生きるために、クスクスと笑える発想と言葉だけは身についた。その糸井氏が2017年に上場して経営者となった。でも通常の経営者とはやはり違っていた。本文にもあるこの一文が心に刺さる。『社長に求められるのは、社長本人が元気で楽しそうで、社員がメシを食べるように給料を支払うことです。』シンプルだけど判りやすい。さらに株式会社ほぼ日のクリエイター集団の考え方が「やさしく、つよく、おもしろく」で、その事業の根幹にあるものが「人によろこんでもらえる!」と言うのも納得できる。経営者には目から鱗の一冊です。</p>		